The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	編輯後記
Author(s)	山本, 楢信
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 222-225
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

なく水面をすべる。庭園は一面の芝生にて松は圓くかりこまれ、左手雜木林の若葉も美しく、海岸の老松、千歳綠かわるなし。床には春畝公の軸をかけ茶菓を饗應せらるゝに寛ろぎて椅子にかけ休息する。階下は明治天皇の行在所となりしところ床には有栖川宮の「養氣得其和」の軸がかゝり、別棟に御寢室、御湯殿あり。芝生に坐して夏の日を一杯に浴びながら記念撮影をなし食堂に集る會員太田君、一同を代表して本日の鄭重なる御歡待を謝し「只今の寫眞、一枚一圓、十枚十圓」と口をすべらせて笑はせる。現事長小倉先生たつて「天祐である今日のお天氣に皇室と關係深き此處に、國民としていふにいはれないある氣分を味ひ風光明媚のところに

一日の清遊を得たるをよろこぶ」旨を述べられる。會するもの木間瀨理事、永田仁助氏及び財津、吉田兩先生を初め四十九名であつた。少憩後辭去、明石の松山先生のお墓に參詣、近頃出版の御遺稿を手向けて回向、燒香して解散する。解散後、尾上の松に古鐘の餘韻を賞し高砂相生の松に遊び石の寶殿の奇をめで曾根天滿宮に參詣、日がとつぷり暮れるまで松の名所を尋ねあるくものも少からずあつた。

編輯後記

山本楢信

秋の空は清爽として靑く靑く澄みわたり日はあたゝかに輝いてゐる。心からうれしそうにニコニコしてやつてみえた西村先生のお顏が目に

うつると吉田先生が仰せられる。西村先生はこうした天氣がおすきだつた。記念祭典の日が來る毎に辛苦して本堂を創設、經營せられた諸先生をしのび奉る。碩學諸先生が本會員の爲め特に御寄與下された天下に誇る名論卓說を滿載して本誌も第九號を發刊することになつた。

昔は國民全體が一つの目的を持つてゐた。例へば明治維新とか日淸戰爭とか日露戰爭といへば國民が一致してこれに當つた。今では一般に考へがばらばらになつて刹那的になり享樂的になつて來て國民は目的を失つたやうにさへ見ゐる。日本人は外患あれば「何にくそ」と大和魂を發輝して一致協力、流るゝ水が一塊の氷に結晶するが如きは今も變りあるべき筈はないが、およそ、その主張すべき主張と理想のある國は必ず興り、たとへ百萬の貔貅を列べたとて主義主張なき國は必ず衰へる。人間は現實に生きなくては嘘であつて理想は空想であつてはならぬ不純分子を一掃して浮び出るきれいさつぱりした生れたまゝの純眞な理想に勇往邁進すべきであると共に道は近きにあり走る者は躓くことを忘れてはならぬ。思想に根本的なものと一時的なものとあつて、その根本的の思想をもとめなければならない。親孝行といふ儒敎の道德は他にいろいろ過激な思想もあつたに關らず、過去三千年、今に傳はつてゐる。そこに何ものかなければならぬ。警世の大文字である「孝の話」を先づ卷頭に揭げて我々の旗幟を鮮明にした所以であり、本堂より恒例によつて頒布の扇子に執齋先生が舜の德を讃美された「孝子」と題する

和歌を印せられたのも因緣がないとはいへぬ。書物を讀むは心の洗濯である。生知安行の聖者はいざ知らず我々は讀書聽講によつて勉強しなければならない。「宋元版の話」によつて我々は心得て置くべき書物の知識を得ることが出來る

日本は災難の多いのが天惠である。天惠が多いのがよいのか否かわからないが、日本のなやみを脊負つてたつ元氣のある日本の若い人々は日本の過去を忘れてはならない。第一に日本獨得の型を發見しなければならない。「敎育勅語と國民道德」によつて　明治天皇の大御心を推量し奉ることが出來る。「山崎闇齋と保科正之」は時に賊軍となり官軍となるも尊皇の赤誠に至りてはともに變るなき國情を指摘するものである

古今懷德堂の思ひ出話は趣味津々聊か以て本堂再建十五周年を記念するものであり、近來頓に重大性を加へたる支那問題の根幹を說くに小川先生あり、歷史自體を檢討するに牧先生あり、鈴木、林兩先生の日本支那の故事を闡明せらるゝあり、日常の豐富な經驗によつて訓戒さるもありて、聊か誇るに足る本誌を刊行し得たる諸先生の厚き御同情に心より謝し奉る。

掲載の順序に前後あるは、印刷を急ぎ到着次第順次印刷にまわした怠慢の致すところで謹んでお詫び申し上げる。昨年十月前號發刊後、早速本號刊行のため約一ヶ年、準備に專心多大の勞苦を拂はれた藤塚君と財津、吉田兩先生の御指導によつて本誌が完成したことをここに報告して御禮を申上げたいと思ふ。

由來、大阪は日本實業の中心點である。その

勤儉力行は貿易の數字を改善し、その奮鬪努力は事業の成績を向上させる。そこに偉大な大阪人の力が所謂、理外の理となつて、最も力强く働いてゐるのであるが、それで往生安心するが如きは本當に使命ではない。日本といひ支那といひ印度といふ國境觀念を蟬脫し接壤善隣の國民を打つて一丸とする大理想に活動して和衷提携、以て三千年來の歷史に隱顯明滅せる王道政治の精神を發揚して、汎アジア主義の宣傳實行をなし、日本をして來るべき世界文化の中心たらしめ、これが完成の任に當たるべきであつて皇室を中心と仰ぎ奉りて義勇奉公一致團結して進むとき、天神地祇も必ずや感應し給ふべきを信じて疑はない。國運の興隆の衰微も一にかかつて我々の一擧手一投足にある。精神を練磨しなければならぬ。身體を剛健ならしめねばならぬ。本誌がそのために聊かたりとも貢獻するところあらば望みの外のよろこびである。會員諸君の加餐奮鬪を祈ると共に本誌のためこの上とも後援鞭撻を懇願する。

附記

全篇を通じ誤字、脫字の有る場合は校正者の責任に付よろしく御寬恕を希ふ　酒井生